

なし「にっこり」の高温障害対策の実証

要約

結果枝密度を慣行の 1.5 倍程度に高めることで、樹冠下の果実が遮光され、日焼け果が軽減された。果皮障害、内部障害、水浸状障害には差が無かった。遮光による果実糖度への影響は無かった。

○ 展示のねらい

近年、夏期の高温により、なし「にっこり」の果肉障害発生が増加している。結果枝の配置密度を高めた整枝により、その軽減が図られた事例があることから、結果枝配置の高密度化による果肉障害発生低減効果を実証する。

高密度区は結果枝密度を慣行の 1.5 倍とし、対照区（慣行の結果枝密度）と比較した。最終着果量は 8 果/㎡とした。施肥および病虫害防除は慣行管理とした。

○ 主な成果

表 1 結果枝密度の違いが、なし「にっこり」の果実品質に与える影響

試験区	果皮色 表面色CC	糖度 %Brix	障害発生程度			
			外部の焼け	果皮障害	内部障害	水浸状障害
高密度区	4.3	12.0	0.1	0.3	0.1	0.1
慣行区	4.6	12.1	0.3	0.2	0.1	0.1

注 1）障害発生程度：0 無、1 軽、2 中、3 多

高密度区の結果枝密度は 4.6m/㎡で、対照区（3.3m/㎡）の 139%だった。

果皮色は高密度区が対照区より低くなったが、糖度には差が無かった。

障害果発生程度は、「外部の焼け」が高密度区で小さくなった。果皮障害、内部障害、水浸状障害は差が無かった。果皮障害は「そばかす症」が一部に見られたが、周辺へのしみや陥没は見られなかった。高密度区では樹冠下中心部に着果した果実の果皮色の進行が遅く、「外部の焼け」が減少したが、周辺部に着果した果実では一部焼け果が見られた。周辺部の摘果を徹底することで効果を高められると考えられた。

○ 今後の方向性

日焼け果の発生軽減効果が実証された。結果枝密度を高めても病虫害の発生が顕著に増加する様子も無かったため、結果枝を等間隔で平行に配置すれば通常の防除で問題ないと考えられた。ただし、継続して結果枝本数を確保するためには、十分な量の予備枝の確保が必要となるため、早期に結果枝を更新（3 年枝以上を残さない）して、新梢発生を促す剪定方法への転換が必要と考えられる。

実施機関：塩谷南那須農業振興事務所経営普及部 TEL 0287-43-2318

実施場所：那須烏山市

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315